

『EARTHRISE 総合英語』の発刊にあたって

—表現のための学習英文法の構築を目指して—

三村 浩一

1. はじめに

来年度からの新学習指導要領の実施に合わせて、新たな総合英語参考書『アースライズ総合英語』が刊行された。見本を見ていただいてもおわかりのように、新しい時代を見据えた「意欲的」な教材に仕上がっていると自負している。この小稿では監修および執筆を担当した筆者の、この参考書への「思い入れ」と、筆者が常々考え、研究していることを披露できればと思う。

2. 新学習指導要領における文法観

2022年度から高等学校で、新しい学習指導要領に基づく英語教育が実施される。今回の改訂の狙いの一つについて、文部科学省のHPでは、「小学校及び中学校との接続及び発信能力の育成の強化を図る観点から、「話すこと〔やり取り〕」の領域を設定するとともに、語、文法事項などの言語材料を言語活動と関連付けて、実際のコミュニケーションにおいて効果的に活用できる技能を身に付けるようにすることとした」と解説している(同省HP)。

この方針のもと、新たに設定された科目「論理・表現」の教科書は、現行の「英語表現」とは趣の異なった設えになっている。「言語活動と関連付けて、実際のコミュニケーションにおいて効果的に活用できる技能」の修得のために、様々な工夫がなされている。

文法を言語活動と関連付けて学ぶことの必要性を否定するつもりはないが、高校生を指導していると単文レベルでの英語を書くのに苦勞する生徒を目の当りにする。文法的な正しい文、コロケーションが適切な文、状況にふさわしい文がなかなか書けないのである。言語活動と関連付けることによって、学ぶことのできる文法は限られるのではないかと危惧している。したがって、教科書に加えて文法面を強化するために、問題集や参考書を生徒に与える必要

性が減じることはないだろう。

3. 『アースライズ総合英語』の特長

3-1 4技能に生かせる文法力

総合英語参考書は教科書を補完するものであるが、本書においては、「4技能につながる文法」を特に意識している。文科省は共通テストにおいて、民間試験の利用を断念したが、それはあくまで共通テストレベルでのことであり、日々の教育実践の中での4技能の養成はこれからも続くのであり、そのための文法の重要性は学習指導要領で述べられている以上に高いと筆者は考えている。どう指導するかが悩ましいところであるが、本書はその悩みに答えるべく、さまざまな工夫を凝らしている。

3-2 教科書との連携

新課程教科書である *EARTHRISE English Logic and Expression I Advanced/Standard* と並行して学習がしやすくなるように、まず、教科書本課の Key Expressions で扱う文法項目の配列と例文を同じものにしていく。また、巻末の文法のまとめ Expressions Plus とも例文が合っている。

さらに、教科書の Key Expressions の内容を表現の視点から広げたコラム Tips for Expression があり、発信に向けた大きなサポートになっている。

★ Tips Expression!

8

助動詞の過去形の働き

would, could などの助動詞の過去形を現在を表すのに使うと、心理的に現在から離れるため、直接的な印象が薄れ、ていねいで控えめな感じを表すことができる。

1. 依頼や勧誘するとき

● Could you tell me how to get to the ballpark? — Sure. 77

Can you ~? は友人など親しい関係の人に依頼するときに使う(● p.103)が、初対面の人や目上の人に対しては、Could you ~? / Would you ~? を使うほうがよい。依頼表現のていねいさの順は、おおむね次のようになる。


Could you ~? > Would you ~? > Can you ~? > Will you ~?

3-3 図解やイラスト、イメージ図を多用

図解やイラスト、イメージ図をできるだけ多く使って、視覚的にも文法を捉えられるようにした。文字情報を補完して頭の中に定着させることを狙ったものである。can の例を次にあげておく。

1-1 can (過去形: could)

can の中心的なイメージは [実現可能]。そこから派生して、以下の意味が出てきます。



■ 実現する能力を備えている	→ 「～できる」	(能力)
■ 状況的に実現することが可能	→ 「～できる」	(可能)
	「～してもよい」	(許可)
■ ～である可能性がある	→ 「～でありうる」	(可能性)

文法の定着をはかるだけでなく、文法が無味乾燥なものと思いがちな高校生の興味を喚起する方策でもある。

3-4 充実したコラム

コラムはとにかく充実している。4 技能につながる Tips for Reading / Writing / Communication / Expression など、盛りだくさんだ。筆者が注目するコラムを 2 つ紹介する。一つは「ネイティブの感覚」。日本人が使い方を間違いやすい表現などについて、ネイティブスピーカーの視点から、ニュアンスなどを解説するコラムだ。使役動詞 make についての次のような解説は生徒にとっては「目からウロコ」になるかもしれない。

My mother made me smile with her gentle words.

(母は優しい言葉で、私をほほえませてくれた。)

ここでは、母が強制的に私を「ほほえませた」のではありません。母の優しい言葉で、私が「(思わず)ほほえんでしまった」のです。

ネイティブ・スピーカーはこのように、make を、目的語の意志とは関係なく、【(自然と)そうさせてしまう】という意味で使うことがよくあります。

次に、主語が無生物の例を見てみましょう。

His joke made us laugh.

(彼の冗談で、私たちは笑った。)

ここでも強制的な意味はなく、his joke が原因となって、私たちが【(自然と)笑ってしまった】ことを表しています。

さらに、一押しなのが、Real English である。このコラムでは看板や広告、新聞記事など、実際に日常で使われている英語を取り上げてその章で扱われている文法項目と関連させて説明する。「生きた文法」の紹介と言える。関係詞の章では、カマラ・ハリス米国副大統領の演説を取り上げており、世界情勢にも少し目を向けさせる工夫をしている。

① Right now, we have a president who *turns our tragedies into political weapons. ② Joe will be a president who turns our challenges into purpose. ③ Joe will *bring us together to build an economy that doesn't *leave anyone behind, where a good-paying job is the *floor, not the *ceiling. ④ Joe will bring us together to end this *pandemic and make sure that we are prepared for the next one. ⑤ Joe will bring us together to *squarely face and *dismantle racial injustice.

3-5 4 技能連携ハンドブック

付録というのは見過ごされがちであるかもしれないが、本書の別冊付録である「4 技能連携ハンドブック」はぜひとも活用してほしい実践的な手引書である。Speaking / Listening 編では、英語の発音のルールやフォーマル / インフォーマルの区別など、Reading / Writing 編ではスラッシュリーディングやパラグラフの展開など、実践的な内容を盛り込んでいる。このようなハンドブックは類書にはほとんどないユニークな取り組みである。

3-6 瑣末主義に陥らない

発信に軸をおいた文法という観点から、文法の記述は詳細すぎることがないように気を配った。あまり細かな情報を与えてしまうと、それを気にして発信の足かせになるようなケースをよく見ているからである。英米の違いなどについても必要最小限の記述にとどめている。どちらを使用しても通じる場合が多いのだから、大雑把な態度も必要だと思う。また、ネイティブスピーカーの意見も個人的なバイアスがあり、頼りすぎるのも危険である。内外の多数の文献を参照して、学校文法ということも考慮しながら、文法・語法の判定を行った。

例えば、助動詞の章の「必要性・重要性などを表す形容詞に続く that 節中で」という項目の [参考] では次のような簡潔な説明にとどめている。

参考 (米)では原形。(英)では(should+原形)が普通であったが、最近では(米)でも(should+原形)。(英)でも原形が使われるようになっており、(米)(英)の差はあまりないと考えてよい。

4. 高校生の typical mistakes

執筆にあたっては、生徒の解答例から拾った typical mistakes を大いに参考にしている。例えば、現行課程の DUALSCOPE English Expression II (数研出版) p. 11 に、次のような空所問題がある。「私たちが初めて会ってから 10 年経った。」

() () () ten years since we first met. この空所に It, has, passed を入れる生徒が予想以上に多かった。「It には時を表す特別な用法があるが、pass するのは具体的な時間であるので、ここでは、It, has, been を入れるべきである」などと説明したが、どこまでわかってもらえたのだろうか。本書でもこの「～してから…年」の表現については、「Unit 3 動詞と時の表し方②」の Tips for Writing (p. 84)でスポットライトを当てている。

もう一つ例をとりあげる。『入試必携 英作文』(数研出版)p. 17 の次の和文英訳問題の誤答例を見てみよう。

「太らないように、私はカロリーの高い食べ物は食べすぎないように心がけている。」

× I try not to eat high-calorie food not to gain weight.

「～しないように心がけている」に try not to という簡潔な表現を選択したのはよいが、「太らないように」を not to gain weight にしたのは、不適切である。「～しないようにする」という目的を表す副詞的用法に not to を使うのは be careful や take care に続く場合に限られる。ここでは in order not to gain や so that I won't gain などにすべきである。この typical mistake についても「Unit 6 不定詞」p. 176 で「注意」として触れている。

5. 仮定法について考えること

筆者は(2018)の論文で、仮定法は if 節だけで、帰結説は推測節ではないかという提起をしたが、これは次のような例に出会ったからである。

Even if that were the case, no one can deny that Ichiro has displayed superb hitting techniques.

(Japan News, 2016. 6. 19)

この文は if 節が仮定法で、帰結説が直説法である。また、逆の例もある。

If a shutdown fails, it would be embarrassing, though not terribly surprising,” said Michael Elleman, a missile expert at the 38 North think tank in Washington.

(Japan News, 2017. 8. 31)

後者の例では、帰結説が will be embarrassing となっても違和感がないが、would を使うことによって断定度を和らげているのであろう。ここで

はこの問題の詳細には入らないが、論文を執筆する中で、Swan (2005)の If S should ~構文に関する次のようなコメントに出会った。

Would is not common in the main clause in these structures.

ちなみに these structures に含まれるもう一つの構文は、If S happen to do ~である。このコメントや他の文献を参照にして、本書 p. 329 では、If S should ~構文に関し、「主節には助動詞の過去形よりも、will などの助動詞の現在形や命令文を使うことが多い。」とした。また、Swan (2016)では happen to を優先して、“should can be used after if in British English with a similar meaning, but this is now unusual”としていることから、google のサイト検索や COCA の検索も踏まえて、本書には「話し言葉では should の代わりに happen to を使うことが多い」という説明も加えている。

6. 終わりに

今年の4月からは大学を定年退職して、古巣の高校にもどり、主に英語表現を担当している。どのように説明すれば生徒はわかるのかということ日々考えながら、授業外で10人の個人添削も受け持っている。現場での経験を参考書の執筆に生かせることは大きな喜びだと思っている。

参照 Web ページ

文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編 英語編」

https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf (2021年9月6日)

参考文献

三村浩一(2018)。「仮定法の帰結節について」『帝塚山学院大学教職実践研究センター年報第4号』25-30.

Swan, Michael (2005). *Practical English Usage* (3rd ed). Oxford: Oxford University Press.

Swan, Michael (2016). *Practical English Usage* (4th ed). Oxford: Oxford University Press.

(帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校 常勤参与・帝塚山学院大学 非常勤講師)